

忠臣蔵物の錦絵と泉岳寺

大久保純一

Chushingura Nishiki-e and Sengaku-ji Temple

はじめに

- ①江戸名所としての泉岳寺
- ②嘉永元年の開帳と忠臣蔵錦絵
- ③各段通しの忠臣蔵シリーズ
- ④芝神明前と高輪
- ⑤泉岳寺門前—まとめにかえり—

[論文要旨]

歌舞伎でもっとも人気のある演目「仮名手本忠臣蔵」は、戯作や川柳、狂歌など、他の大衆文化の諸ジャンルに多くの題材を提供しているが、錦絵の分野でも忠臣蔵を素材にした作品は膨大な点数にのぼる。実際に劇場で上演された舞台に取材した錦絵の他に、忠臣蔵に関わる様々な主題と形式を持つ作品が生み出されており、従来の研究ではおもにその多様さに焦点が当てられてきた。

それに対して本稿では、忠臣蔵物の錦絵をおもに出版史の視点からとらえようとするものである。とくに忠臣蔵にゆかりの泉岳寺に焦点を当てて、この江戸でも有数の名所が忠臣蔵物の錦絵の制作と深い関係を有していたことを明らかにする。

まず、「藤岡屋日記」は、嘉永元年の泉岳寺の開帳の際に数多くの錦絵が刊行された」とを伝えているが、そのおかげで義士録的なシリーズであったことが指摘できる。

さらに、忠臣蔵物の錦絵のなかで特徴的な形式である、各段を通して人気場面を背景に描写豊かに描くシリーズ物の多くが、和泉屋市兵衛など芝神明前の版元から刊行されていることを指摘し、高輪の泉岳寺に近い芝神明前という立地条件が、忠臣蔵物の出版に影響を及ぼしていたことを明らかにした。

泉岳寺は忠臣蔵の義士たちの墓所であり、江戸屈指の名所として多くの参詣客を集めていたにもかかわらず、名所絵が盛んに描かれるようになつた天保以後も、広重らの江戸名所絵に描かれるることはまつたくなかつた。この点に関しては天保以後、各段通りのシリーズの最終図である十二枚目に、高輪の海岸を連想させる海景を背景に、義士たちの焼香場面を描くことが通例となり、この最終図が泉岳寺の名所絵としての機能も併せもつていたと推測できるのである。